



## 高 1 講演会 広島大学 中矢 礼美 准教授 (5 月 30 日実施)

「グローバル人材とはーグローバル人材に必要なコンピテンシー学習に向けてー」

### Topics 1 講演の目的

広島中学校・広島高等学校では、グローバル時代に活躍できる人材の育成を目的にさまざまな活動に取り組んでおり、SGH指定を受けて以降も、持続可能な社会を構築するグローバル・リーダーの育成に力を入れています。国際的に活躍される大学人から、リーダー像についての分析を伺うことで、求められる資質・能力・態度などを認識したり今後の目標設定に役立てたりすることをねらいとして、本講演を実施しました。

### Topics 2 講師の先生

講師の中矢礼美先生は、比較教育学・カリキュラム開発論を専門とされ、インドネシアなど世界中を飛び回って研究されています。中矢先生には、本校のSGH指定以前から、グローバル教育について御指導・御助言をいただいております。4月に本校高校生徒全員が取り組んだ「グローバル・コア・コンピテンシー（グローバル化時代に必要とされる能力・技能のこと）」に関するアンケート（GCCアンケート）も、中矢先生の御指導のもと、作成したものです。今回の講演以降も、本年度は「留学生対話」（高校1年生対象：7月9日）と「グローバル問題研究夏季集中講座」（高校1年生対象：7月30日・31日）についても、中矢先生に御指導いただきます。

### Topics 3 講演の内容

「グローバルな課題の解決に対応する国内のさまざまな職業に就く専門家」もグローバル人材であるという説明から、我々が普段思っている「グローバルビジネスで活躍している人物」といった固定概念が覆されていきました。

4月に実施したGCCアンケートの結果から、グローバル・コア・コンピテンシー向上の鍵として、「①グローバル・コア・コンピテンシーの理解と正しい自己評価」「②具体的な目標の設定・行動計画の立案と実行」「③振り返りによるコンピテンシー向上・停滞の原因の振り返り・行動計画の修正」「④知識学習、経験学習、仲間との学びあい、教師からのフィードバックによる学び合いサイクルの継続と学びの深化・拡大」の4点を教えていただきました。講演会後半の実践編では、生徒達が広島大学の留学生の方達3名へ、英語で自己紹介を行いました。「自己紹介を聞く側はどんなことを知りたいのだろう」「相手の立場に立って考えることがコンピテンシーを向上させることにつながる」ということを教えていただきました。



### Topics 4 生徒の感想より

- 自分をしっかりと認識し理解、管理することを意識して、グローバル社会で活躍できるようになりたいです。
- 「グローバル人材」と聞くと必ず海外で活躍しているほんの一握りの人」というイメージでしたが、それとは実際は真逆で、誰でもなりうるものだということを知り驚きました。
- どの国で起こっている問題でも自分のこととして捉えることや、ニュースや新聞で知るだけでなく、もう一步踏み込んでそれぞれの問題について掘り下げられるとより良いのではないかと感じました。グローバル・コア・コンピテンシーは最終的に行動するということが大切なのだと思いました。

# 高2講演会 広島修道大学 国際コミュニティ学部 竹井 光子 教授 「SGH課題研究①異文化交流」(5月24日実施)

## Topic 1 講演の目的

高2グローバルコースの総合的な学習の時間では、課題研究への準備と並行して異文化交流の実践をテーマとするプログラムが進行しています。これまでの海外フィールドワークや異文化交流を振り返り、ノウハウをポスターにまとめるワークショップに始まり、この竹井先生の講演を経て、高1生の留学生対話で異文化交流のノウハウを活用するのが1学期の内容です。この流れは2学期の修学旅行やハワイフィールドワークにもつながっていきます。

竹井先生の講演会では、いったん自分達なりに異文化交流についてまとめた後で専門家のレクチャーを聴くことにより、考えを整理したり深めたりすることをねらいとして実施しました。

## Topic 2 講師の先生

広島修道大学 竹井 光子先生は広島出身の方です。国際交流に長年取り組んでこられました。広島修道大学国際センター長として留学生の送り出しや受入れに携わってこられました。現在は国際コミュニティ学部に御勤務です。

高2生の考える「日本文化」をプロットする竹井先生  
「日本食」という回答が多数でした



## Topic 3 講演の内容

- 文化は氷山のようなもので、「見える文化」と「見えない文化」があるが、実は「見える文化」は氷山の一角にすぎない。異文化との摩擦を解消するためには「見えない文化」つまり、行動の背景にある価値観や感じ方などを考慮する必要がある。
- 日本は高コンテクスト社会である。「言わなくても気持ちは伝わる」と思っている。世界には「はっきり言わないと伝わらない」社会もあり、日本の「常識」で対応しては、うまくコミュニケーションが成立しない。
- 異文化受容のプロセスは以下の5段階で考えられる ～自分は今どの段階にあるのだろう～

- 高次 ↓
- 1 自文化中心の段階
  - 2 自他の違い（見えない文化）に気づく段階
  - 3 文化を相対的に見る段階
  - 4 新しい文化を取り入れる段階
  - 5 新しいアイデンティティが確立される段階

※異文化を受容することは皆が同じ価値感を持つことではない。違う価値観も理解し尊重することである。

## Topic 4 生徒の感想より

- 今まで異文化交流について考える機会は多かったです。今回のように「文化とは何か」という所から深く掘り下げて考えることはなかったので新鮮でした。「文化」と言われると、やはり物質的なものが思い浮かびやすいが、今日のお話でそれらはほんの一部に過ぎないことがわかりました。「和の精神」や「おもてなし」などに代表される日本らしさは、目には見えない部分に隠れていると思いました。

日本の高コンテクスト文化や集団主義などが必ずしもよいとは言えないし、一方で低コンテクストや個人主義の方がよいということもないけれど、それぞれの良さを理解した上で異文化交流をすることが大切だと感じました。また、異文化受容のポイントでもあった、「違いを楽しむ」ということは、同じ日本人同士の人付き合いの中でも活かしていけるのではないかと思いました。

- 前回の総合で考えた異文化コミュニケーションの中では、「コミュニケーション」についてしか考えていなくて、「異」と「文化」について考えてみるというのはとても新鮮でした。今まで私が留学や留学生との交流で気づいたことや漠然と思っていたことを、きちんと論理的に教えていただいて面白かったし、頭の中がすっきりした気がします。特に高コンテクスト文化と低コンテクスト文化のことはとても印象的でした。そうした違いを踏まえて、5つのステップを達成した人がグローバルな時代に必要で、でもそれはとても難しいし、実際に経験を何度もしないとアイデンティティの確立というハードルは高いなと思いました。
- 竹井教授のお話はとてもおもしろかったです。私は最初に「日本文化とは」と問われたとき真っ先に日本食が思い浮かびました。知らず知らずのうちに物質の方に目を向けているのだと改めて気づかされました。また、私が最も印象に残ったのは低コンテクスト社会と高コンテクスト社会の話です。私は3月にオーストラリアに行ったのですが、そのときこの一種の文化の違いを身をもって体験することができたからです。私はいつも自分の気持ちを曖昧にしがちなところがあるので、今日のお話を聴いて相手によってははっきり述べることを最重要視すべきだと感じました。自分の普段気付かないところで持ちがちな偏ったイメージをもう一度見直したいと思います。異文化交流はこれからさまざまな場面でしていくことなので、しっかり活かしつつも楽しみたいです。

## 高3卒業研究中間発表会兼SGH課題研究発表会（6月7日実施）

### Topic 1 目的・概要

本校では毎年6月に高3生による卒業研究中間発表会を行っています。昨年度よりグローバルコースの生徒によるSGH課題研究発表会も兼ねて実施しています。発表はスタンダードの各クラスから1人ずつの4人と、グローバルコースの4人で発表を行いました。

また、今年度は平成29年度海外フィールドワーク②inオーストラリアの報告会も研究発表の前に行いました。講評を広島大学大学院教育学研究科 副研究科長 グローバル教育推進室長 松見法男 先生と、広島県教育委員会高校教育指導課 指導主事 助迫理香 先生にお願いしました。

### Topic 2 発表者・テーマ

今年度の発表者は卒業研究中間発表会4人、SGH課題研究発表会4人で、それぞれ5～6分程度の発表。

順	年組	発表者	テーマ
	2-5	平尾 雪乃	[フィールドワーク②in オーストラリア] FOOD WASTE
1	3-4	宗條 堇	特別活動(TOKKATSU)における合意形成と集団志向に関する探索的研究 ～フィンランドでの留学経験を踏まえた、協働性を育む「沈黙のマネジメントモデル」の開発～
2	3-6	西岡 航生	回転運動に着目した走り幅跳びにおける踏切前2歩“長-短”の動作の重要性の証明
3	3-5	高橋 智志	無常観を翻訳する ～日本独自の感性はグローバルになりえるのか～
4	3-2	細谷 亮太	動画解析による卓球のスイングにおける手首・膝の軌跡の計測 ～未経験者と経験者の比較を通して～
5	3-1	楠元 海斗	鏡による住宅用太陽光発電システムの効率化
6	3-3	岡田 実優	広島県の高等学校における平和教育の在り方について ～アクティブラーニングを使用した授業の提案～
7	3-6	梶村 晴海	「腕組み」が記憶力にもたらすプラセボ効果の検証
8	3-5	鍋谷 美月	Research on Colored Pictograms and their Interpretation

### Topic 3 講師の先生からの講評



広島大学大学院教育学研究科 副研究科長 グローバル教育推進室長 松見法男 教授  
発表の際は、論理的に相手を納得させる「論理に基づく説得」と、情緒的に訴えて説得の道筋にする「情緒に基づく説得」が重要であり、更に、「損得」として、場を共有することで何か得をする発表であってほしいと述べられた。また、最後に新しいテーマには伝統的な方法を、また、過去に研究しているテーマには新しい方法を使う方がいいというアドバイスをいただいた。



広島県教育委員会 高校教育指導課 助迫理香 指導主事  
今一度点検すべき点として、①研究課題の設定について、解決するのに意味のあるものなのかどうか、また、限られた時間の中で研究の見通しが立てられる課題であるか、②論理性の部分で、問いに対して答えることが出来ているか、という内容でご指摘いただきました。

### Topic 4 生徒の感想より

#### 【高1・2年】

「発表を聴いて、先輩の卒業研究のどのような点を参考にして、自分の研究に取り組みたいと考えましたか。自分の卒業研究に対する思いも含めて書きなさい。」

- 私が印象に残ったのは資料、データの収集の仕方です。ただ既に存在しているデータを聞くよりも興味を持って聞くことができたので、私もできるだけアンケートを取って考察し、実験や調査をしていきたいと思いました。また、特別な留学やフィールドワークなど特別な経験や活動もオリジナリティのある研究につながると思うので、今のうちに様々な活動に参加しておきたいと思いました。
- 今年は昨年度よりも自分自身のこととして聴けました。特に参考になったのは検証や実験の方法についてです。私は人間工学に関連するテーマで研究したいのですが、今の私ができる範囲でどのようにテーマ設定、実験、検証したらよいのか具体的なイメージが持てませんでした。しかし今日の発表や講評を聴いて何に気を付けたらよいのか、実際にどのようにまとめたらよいのかが分かり、自分の構想が見えてきました。
- 先輩の卒論では今まで習ってきたことを用いて分析しているものが多くあった。特に理系の先輩は二次関数、三角関数、ベクトルなどを使っていました。私も今まで授業で学んできたことをヒントにして卒論に活かしていきたいと思う。

#### 【高3年】

「学年代表者の発表を聴いて、どのような点が優れていると感じましたか。」

- 今年は自分も論文を書いた立場で聴いたので、実験で仮説と違った結果が出ていたことやその考察が大変だったなど、論文作成にあたっての難点を共感しながら聴くことが出来ました。また、発表者がそこを隠さず説明していた点は、あたり前ではあるけれども論文をより正確にする良い点だと思いました。
- どの発表者も論理的に自分の研究を進めていて発表も論理的でわかりやすかったです。自分は研究を進めている間に自分の研究の目的や進め方を見失ってしまうことが多かったが、発表者のように1つ1つステップを踏みながら課題設定、解決というふうになればもっと深く研究をすすめられたのかと思いました。
- どんな質問が来てもしっかり的確に答えられており、自らの発表内容を深めて考えられていることが十分伝わりました。私が今回発表者の研究内容を聴いて最も驚いたことは、実験を行った際に出た失敗点や反省点を気付いただけで終わらせるのではなく、それらの点を新たなポイントとして実験に取り入れていたことです。
- 質疑に対する応答のレベルがとても高く、発表者は論文の作成にあたって深い考察、分析を行っていることがわかった。また、どの研究も着眼点が独創性のあるものばかりであり、聴き手の興味、関心を引きつける内容ばかりだった。仮説の検証に関して様々なアプローチがあり、検証方法の正当性もしっかり明らかにしているものなど、研究内容によって応用をきかせることで研究の質もだいぶ変わってくるなど感じた。